

A Study of Potential Expressions in Modern Japanese:
With Particular Reference to Non-Volitional Intransitive Verbs

吕雷宁◎著

現代日本語における可能表現に関する研究
—無意志自動詞を中心に—

现代日语中无意志 自动词可能表达的研究

(日文版)



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



A Study of Potential Expressions in Modern Japanese:
With Particular Reference to Non-Volitional Intransitive Verbs

吕雷宁◎著

現代日本語における可能表現に関する研究
—無意志自動詞を中心に—

**现代日语中无意志
自动词可能表达的研究**
(日文版)



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内 容 提 要

日语的无意志自动词(即:有对无对自动词和无意志自动词)与态、相、情态等诸多语法范畴密切相关,是日语语法的重点,也是日语学习过程中的一大难点。笔者从可能的视角对其进行了探讨,阐明了一些迄今未被解决的相关疑难问题。主要内容概括如下:①理清可能表达的概念范畴。②深入探讨了无意志自动词难以与可能形式接续的根源所在。③指出“动词的意志性”、“主体性”、“事态的性质”是影响无意志自动词可能表达的3个因素。④分析无意志自动词与「(ら)れる」、「ことができる」的接续条件,弄清这两种可能形式在接续条件上的区别。

图书在版编目(CIP)数据

现代日语中无意志自动词可能表达的研究 / 吕雷宁著.

—上海:上海交通大学出版社,2014

ISBN 978-7-313-12445-6

I. ①现… II. ①吕… III. ①日语-语法-研究

IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 301353 号

现代日语中无意志自动词可能表达的研究

著 者:吕雷宁

出版发行:上海交通大学出版社

地 址:上海市番禺路 951 号

邮政编码:200030

电 话:021-64071208

出 版 人:韩建民

印 刷:凤凰数码印务有限公司

经 销:全国新华书店

开 本:880mm×1230mm 1/32

印 张:7.25

字 数:170 千字

版 次:2014 年 12 月第 1 版

印 次:2014 年 12 月第 1 次印刷

书 号:ISBN 978-7-313-12445-6/H

定 价:38.00 元

版权所有 侵权必究

告 读 者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:025-83657309

序 文

著書を刊行するというのは、特に人文科学や社会科学を専攻する者にとって、一家の主が念願の家を建てるようなものである。それは夢を実現させるための一大事業であると言ってもよい。世間にはマイホームを手に入れたくてもそれがかなわない人がいっぱいいるし、長年にわたって研究に腐心してきてもその成果を著書として結実させることができない人もたくさんいる。それに比べて、呂雷寧さんは若くして著書を持つ研究者になった。何と幸せなことか。何と喜ばしいことか。

呂雷寧さんと私との縁は、10年ほど前に彼女が名古屋大学大学院に入学し、私が指導教授になって以来のものである。入学当初のことはよく憶えている。背の高い人だと思った。彼女の話す日本語は日本人のそれと変わらないと思った。そしてもう一点、「雷寧」というちょっと厳めしい名前は思いやりがあって優しげな人柄にそぐわないと感じた。

私は常々思っているのだが、研究者に求められているものは真実を見抜こうとする執念のようなものである。やる気とか粘り強さという言葉に置き換えてもよいが、呂雷寧さんにはそういうものが十分に備わっていた。彼女は一貫して日本語可能表現の研究に打ち込んだ。壁にぶちあたることもしばしばあったが、諦めずに取り組み続けたのがよい。

意外に思われるかもしれないが、中国語話者が日本語の文法を研究するのは容易なことではない。中国語は語彙が驚くほど豊かである反面、文法があまりにも単純であり、日本語の文法を研究するための比較対象としてあまり役に立たない。文法が単純である究極的な理由は漢字の存在が文法形態素の発達を妨げてきたことに求められようが、いずれにせよ、そのような言語を母語とする人が日本語の文法カテゴリーを的確に把握した上で新基軸を打ち出していくのは楽な仕事ではないのである。ややもすると、形態をおろそかにして意味だけの世界に溺れてしまいかねない。そういう過ちをおかした先行研究も現に見受けられる。指導生であった呂雷寧さんに私が教授したものは何であったかと自問したとき、文法記述には形態と意味の両面に対する配慮が必要だと説いたことしか思い浮かばない。もちろん、彼女は私の助言が意味するところを即座に理解し、それを素直に受け入れるしなやかな精神の持ち主であった。

最後におこがましいが、私が研究上のモットーとしている二つの言葉を呂さんに贈りたい。一つは「ひとり荒野に行く」という言葉。真理探究の道は険しくて孤独なものと覚悟されたい。もう一つは「過^{あやま}即^{すなわ}勿^{はばか}憚^な改^は＝過^{あやま}てば即^{すなわ}ち改^はむるに憚^なること勿^{はばか}かれ」という『論語』の中の言葉。これもまた気概の問題である。

2014年10月24日

中部大学特任教授

名古屋大学名誉教授 近藤健二

前 書 き

本書の著者である呂雷寧さんに私が初めてお会いしたのは、今からちょうど10年前の2004年春のことでした。当時彼女はまだ博士前期課程2年生で、何でも学び取ってやろうという意欲に満ちた授業中のひたむきな眼差しが印象的な、真面目で勉強熱心な学生さんでした。その後博士後期課程に進学されてからは着々と実力を付けられてゆき、また前指導教員の近藤健二先生(現名古屋大学名誉教授)のご退官に伴って、私が直接に研究指導に携わるようになってからは、当然ながら学問上の議論をする機会も増えました。面談では、私は私で、そして呂さんは呂さんで頑固なために、お互いに持論をなかなか曲げず、意見の一致を見ないままオフィス・アワーが時間切れになることも少なくありませんでした。それでも彼女は私のもとに足しげく通って来られ、私も覚悟を決めてどこまでも議論に付き合いました。こうして、初稿が形を成すまでに約4年、その後の度重なる書き直しにさらに約1年の年月を費やして、ようやく博士論文が日の目を見ることになりました。晴れて博士号を取得されて間もなく、彼女は上海财经大学に常勤講師としての職を得られ、現在ではご自身が学生さんを指導される立場になられたと伺いました。かつての指導生は今では一人のかけがえのない友人となり、再会するたびに一回りも二回りも成長されているお姿を拝見して、かつての指導教員として大変喜ばしく思っています。

本書は、呂さんの院生時代のご研究の集大成とも言えるその博士論文です。無意志自動詞は何故可能表現になりにくいのかという、呂さんご自身が日本語を習得される過程で持たれた素朴な疑問に端を発し、統語論的にも意味論的にも明確な規定をすることの難しい日本語の可能表現と無意志自動詞との関わりの解明を試みておられます。彼女の研究の手法は、言語現象に関わる要因を一つ一つ拾い上げ、それぞれの要因の影響を深く掘り下げて検討するというオーソドックスなもので、言語学の最先端の時流とは無縁の、極めて古典的で淡々とした意味論分析ですが、それだけに、年月を経ても色あせることのない、長い学問的な寿命を持ち得る力作であると私は信じています。もとより、彼女の日本語母語話者以上に鋭い日本語への言語直観に裏打ちされた数々の指摘は、極めて的確で説得力があります。若干意味論的なアプローチに偏重しているきらいはあるかと思われますが、全体を通して見れば、日本語と中国語との対照研究という観点からも、日本語教育への応用という観点からも様々な示唆に富む一冊と言えましょう。

日本語学、中国語学、日本語教育を専門とする方たちはもちろんのこと、言葉の研究に関心をお持ちの全ての方たちにぜひ本書をお読みいただき、ご自身の立場から検討を加えていただければ大変嬉しく存じます。無論、厳しい目でご覧いただければ、まだまだ不完全な箇所も多々あろうかと思えます。著者の呂さんともども、私といたしましても、読者の皆様のご叱正やご批判をお願い申し上げる次第です。

凡 例

1. 例文、あるいは語句の先頭に付される「*」は、その文・語句が不適格であることを表す。「?」は、容認度の低いことを表す。
2. 例文中の分析対象語句には下線____を施す。また、分析対象語句以外の部分で、問題としている箇所には下線~~~~を施す。
3. 例文が実例の場合、例文の後ろに出典を記す。引用および出典が記されている例文以外は、筆者による作例である。
4. 例文番号、表番号および図番号は、すべて各章ごとの通し番号である。
5. 注は、各ページの末尾に挙げる。なお、注の番号は各章ごとの通し番号である。

用語について

1. 無意志自動詞

仁田(1988: 35)は無意志動詞について次のように定義している。

自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞がいわゆる無意志動詞である。

本書では、この定義に従い、自己制御性を持たない自動詞を無意志自動詞であるとする。

2. 有対自動詞/無対無意志自動詞

「入る」、「助かる」、「混ざる」のような、形態的・意義的・統語的に対応する他動詞を持つ自動詞は、西尾(1978: 174)では無意志動詞に分類され、「対立他動詞を持つ自動詞」と呼ばれ、早津(1987a)では「有対自動詞」と呼ばれている。本書はこれらの定義に従う。

そして、「降る」、「腐る」のような、形態的・意義的・統語的に対応する他動詞を持たない無意志自動詞を無対無意志自動詞と称する。

3. 無意志自動詞表現

無意志自動詞の「る」形(またはその否定形)で終わる表現を指す。これは工藤(1987・1995)、高橋(2003)で言う完成相「する」の現在形に相当する。

4. 有対自動詞表現

有対自動詞の「る」形(またはその否定形)で終わる表現を指す。

5. 無対無意志自動詞表現

無対無意志自動詞の「る」形(またはその否定形)で終わる表現を指す。

6. 有情物/非情物

宮島(1972: 422)は、「<有情物>というのは、つまりほとんどは人間だが、動物も、感情や理性をもったものとしてあつかうばあいには、ここにはいる」と述べている。そして、藤井(1971)、青木(1980)、金子(1980)、渋谷(1986)、森田(1987)なども、人またはその他の動物を有情物とし、それ以外を非情物としている。本書はこれらの研究に従う。

7. 主体

本書は青木(1997b)に従い、動詞によって表される動作・状態の担い手を主体と称する。主体は多くの場合に、文の主語として表されるが、必ずしも主語とは限らない。例えば、次の(1)において、「この茸」は主体でもあり主語でもある。これに対して、(2)においては、主語ではあるが、「食べる」という

動作の受け手を指し、主体とは考えられない。

(1) この茸は簡単に育つ。

(2) この茸は食べられる。

目 次

第1章 序論	1
1. 研究の目的	1
2. 研究の対象	3
2.1 考察対象とする可能表現	3
2.2 考察対象とする無意志自動詞	5
3. 本研究の構成	5
第2章 可能表現とは何か	7
1. はじめに	7
2. 可能の形式	7
2.1 可能表現の位置付け	7
2.2 形式の検討	8
2.2.1 従来より認められてきた形式	8
2.2.2 青木(1980)と小矢野(1979・1980・1981)	10
2.2.3 張(1998)	13
2.2.4 本書の立場	17
3. 可能の意味	19
3.1 可能の意味に関する先行研究	20
3.1.1 有情物の可能	20
3.1.1.1 藤井(1971)	20
3.1.1.2 小松(1995)と津田(2000)	22

3.1.1.3 「有情物の可能」における問題点	23
3.1.2 非情物の可能	24
3.1.2.1 奥田(1986)と森田(1987)	24
3.1.2.2 「非情物の可能」における問題点	27
3.1.3 受動的可能	28
3.1.4 価値の被動と受容可能	31
3.1.5 認識可能	32
3.1.6 先行研究における問題点のまとめ	34
3.2 可能の意味分類	35
3.2.1 能力可能	35
3.2.2 条件可能	37
3.2.3 属性可能	39
3.2.4 認識可能	44
4. 可能に含まれるニュアンス	47
4.1 先行研究	48
4.2 先行研究における問題点	50
4.3 本書の考察	53
4.3.1 動作・状態のにない手である有情物の希望	53
4.3.2 事柄の成立に対する話者などの期待	56
4.3.3 話者による客観的叙述または判断	58
5. 本章のまとめ	60
第3章 無意志自動詞表現の性質	63
1. はじめに	63
2. 無意志的な状態変化	64
2.1 有対自動詞	65
2.2 無対無意志自動詞	66

2.3 状態変化の起因	68
3. 認識のモダリティの性格	70
4. 可能の含意	73
4.1 先行研究とその問題点	73
4.2 可能を含意する有対自動詞表現	76
4.2.1 動作主の意図が潜在する場合	77
4.2.2 動作主の意図が潜在しない場合	79
4.2.2.1 属性可能の含意	79
4.2.2.2 認識可能の含意	82
4.3 可能を含意する無対無意志自動詞表現	83
4.3.1 動作主の意図が潜在する場合	83
4.3.2 動作主の意図が潜在しない場合	84
4.3.2.1 属性可能の含意	85
4.3.2.2 認識可能の含意	86
4.4 第4節のまとめ	88
5. 中国語との対応関係による裏付け	89
5.1 中国語の可能表現	90
5.1.1 結果補語と方向補語の意味	91
5.1.2 可能補語と可能の助動詞の意味用法	94
5.1.3 第5.1節のまとめ	97
5.2 無意志自動詞表現と中国語の可能の形式との 対応	98
5.2.1 変化動詞の場合	98
5.2.2 静態動詞の場合	102
5.3 第5節のまとめ	102
6. 本章のまとめ	104

第4章 無意志自動詞表現と「Vる＋ことがある/ない」	
との比較	106
1. はじめに	106
2. 「ことがある/ない」に関する先行研究	107
3. 事柄生起の可能性	109
3.1 話者の判断による可能性	109
3.2 客観的叙述による可能性	111
3.3 事物の属性	112
4. 事態発生の度合い	114
4.1 無意志自動詞表現と「ことがある」	114
4.1.1 頻度における差異が見られない場合	114
4.1.2 頻度における差異が見られる場合	115
4.2 否定の無意志自動詞表現と「ことがない」	118
5. 事柄の客観性	122
6. 語用論的用法	126
7. 本章のまとめ	131
第5章 無意志自動詞の可能表現	133
1. はじめに	133
2. 先行研究とその問題点	134
3. 無意志自動詞の可能表現に関わる要因の分析	137
3.1 動詞の意志性	137
3.1.1 動詞における意志性の段階性	138
3.1.2 動詞の意志性による制約	140
3.2 主体性	143
3.2.1 有情物の場合	145
3.2.2 非情物の場合	148

3.3 事態の性質	151
3.4 第3節のまとめ	156
4. 無意志自動詞と可能の形式との共起条件	157
4.1 主体が有情物の場合	157
4.1.1 過程の自己制御性を持つ場合	157
4.1.2 非自己制御性を持つ場合	159
4.1.3 第4.1節のまとめ	163
4.2 主体が非情物の場合	165
4.3 第4節のまとめ	170
5. 本章のまとめ	171
第6章 終わりに	175
1. 可能の形式	175
2. 可能の意味	176
3. 無意志自動詞表現の性質	179
4. 無意志自動詞表現と「ことがある/ない」	182
5. 無意志自動詞の可能表現	184
6. 今後の課題	187
参考文献	190
例文出典	208
あとがき	209

第 1 章 序 論

1. 研究の目的

本研究は、可能という観点から日本語における無意志自動詞について考察を行おうとするものである。無意志自動詞は、次の例に示すように、一般的に可能表現^①に用いられにくい。

- (1) a. 娘は大きく育った。
b. *娘は大きく育てた。
c. ?娘は大きく育つことができた。
- (2) a. 春になれば、桜は咲く。
b. *春になれば、桜は咲ける。
c. ?春になれば、桜は咲くことができる。
- (3) a. 水と油はよく混ざらない。
b. *水と油はよく混ざれない。
c. *水と油はよく混ざることができない。

(a: 『外国人のための基本語用例辞典』:950)

① 本書では、「なぜお日様はいつも早く起きられるだろう。」のような、擬人化されている場合の可能表現を考察の対象外とする。